

堀内新泉の宇宙探検—科学小説の起源が語るアンチ・ミメシス

ストリップリ ジュセッペ

家庭小説として紹介された作品で明治後期にデビューした堀内新泉は、立志小説の最も多作な作家として知られており、主に立志小説と植民小説というジャンルの枠組みの中で論じられてきた。しかし、当時探検小説というラベルで雑誌に載せられた彼の数少なくない作品は注目されてこなかった。本発表は堀内新泉の探検小説の一部を占め、現代では SF の作品として認められている宇宙探検を語るものに焦点を当てる。彼の著した宇宙探検ものは少なくとも四作現存しているが、本発表では明治後期の「三大冒険雑誌」の一つである『探検世界』という雑誌に掲載された「水星探検記」(1906)と「月世界探検隊」(1907)という二つの短編小説を扱う。この二作にはいくつかの共通点が見られる。プロットとしては両作とも、飛空船の進歩により太陽系各星との交通の途が可能になったという場面設定で、物語が提供する異界が当時知られていた科学的な知識と空想によって織りなされている。また、両作とも近代の二つの特色である科学と植民というレンズを通じ、知ることができ、同時に掌握し得る未知の存在を紹介する。

先行研究では、日本文学の文脈のなかで SF というジャンルは主に戦後に生まれたとされる指摘がほとんどで、確かに明治時代では科学小説 (SF) は文学ジャンルとしては確立されていなかった。しかし、堀内新泉の作品が示すように、科学小説的な物語が全く存在しなかったわけではない。彼の宇宙探検を扱った作品は、明治から戦後に至るまでの多種多様な文学作品から成る、いわゆる「SF 古典」の一つの例として捉えることができる。このような視点から彼の宇宙作品群を分析することで、日本 SF の起源を、SF 古典作品が探検小説、冒険小説、科学小説などの枠組みで認知されていた明治時代まで遡って考えることができる。日本近代文学が確立されはじめた明治期に、思弁的な空想を取り扱う SF、というジャンルを設定することにより、日本近代文学の一つの特徴が浮かび上がる。それは、明治後半に坪内逍遙の『小説真髓』などの文学評論で強く主張されていた写実主義に対する、ありのままの現実から距離を取る「アンチ・ミメシス (anti-mimesis)」という特徴である。

Horiuchi Shinsen's Space Explorations: Anti-mimesis and the Origins of the Scientific Novel

Strippoli Giuseppe

Horiuchi Shinsen debuted in the literary world in the late Meiji era (1868-1912) with a series of works presented as family novels. He is known as the most prolific writer of success novels, and has been discussed primarily within the framework of genres such as the success novel and the colonial novel. However, a conspicuous number of the works he published in magazines has been left outside of the field of inquiry. This presentation will analyze one part of Horiuchi's adventure novel output, focusing on a group of stories that may be treated as examples of science fiction. There are at least four short stories of space exploration and this investigation will take into consideration two of them: "Suisei tanken-ki" (1906) and "Gessekai tankentai" (1907), both of which were published in *Tanken sekai*, one of those magazines from the end of the Meiji era known as the "three major adventure magazines." The two works share several similarities. They both present a narrative setting in which interplanetary travel has become possible thanks to the progress of air vehicles. They offer other worlds which are constructed with the aid of imagination and the scientific knowledge of the time. Furthermore, both works describe the Other as an entity that can be known and conquered through the lenses of science and the colony, two of the paradigmatic elements of modernity.

Within the context of Japanese literature, it has been argued that the genre of science fiction arose in the post-war years. It may be incorrect to say that the scientific novel (SF) was a literary genre that had already been established during the Meiji period. Nonetheless, Horiuchi's short stories reveal the presence of science-fictional texts. It is possible to see Horiuchi's works narrating space explorations as one example of the so-called "classic SF," a heterogeneous corpus produced from the Meiji era to the post-war years. By evaluating Horiuchi's space fiction in such a way, it becomes possible to trace back the origins of Japanese science fiction to the Meiji era, when the genre was recognized within the framework of the exploration novel, the adventure novel, and the scientific novel. By locating a genre such as science fiction—which makes use of speculative imagination—in the Meiji era, that period when modern Japanese literature was beginning to establish itself, one feature of modern Japanese literature is brought into fuller view: its "anti-mimesis." This term refers to the act of keeping a certain distance from reality as such, and expresses a narrative tendency that stands in contrast to the kind of realism advocated by Tsubouchi Shōyō in his essay *Shōsetsu shinzui*.

堀内新泉（堀内文麿、1873－？）に関する伝記的情報は多くはありませんが、幸田露伴の門人であり、徳富蘇峰が発刊した「国民新聞」で文筆生活に入ったことが知られております。堀内の最初の作品は家庭小説という宣伝文句で出版されましたが、それでは商業的な成功を収める事ができませんでした。しかし、1905年6月に立志小説である「^{立志}人乃兄_{小説}」が成功雑誌社から発表されたのを契機に、その後は立志小説を多く発表し「立志小説界の泰斗」として宣伝されていました。しかし、立志小説は堀内に貼られた唯一のレッテルではありません。家庭小説以外、植民小説や探検小説も執筆しました。先行研究では堀内の立志小説と植民小説は検討されましたが、探検小説として発表された作品群は注目されてきませんでした。しかし堀内の探検小説は、成功雑誌社のもう一つの雑誌である「探検世界」で中心的な役割を果たしました。本発表では、探検小説として出版された作品群の宇宙探検というテーマを扱うSF的短編小説に絞り、その中の「水星探検記」と「月世界探検隊」という二つの作品を分析することで、そこに現れているSF的発想が、同時代文壇に通じる問題系を有していることを明らかにします。

「月世界探検隊」は、「日本で最初の雑誌のSF特集」と考えられる1907年10月の刊行の「探検世界」臨時増刊号「月世界」特集に掲載されました。物語は「新飛空器」に乗り組んだ探検隊の宇宙冒険譚となっており、火星を旅した探検隊が地球への帰路の途中、月に着陸し、そこで繰り広げられる月の人々との接触を描いたものです。作品の冒頭では語り手が技術の可能性と知識の発展との結びつきについて次のように述べます。

今より僅一世紀以前に於いて、今日広く世界に行はれて居る汽車、汽船、電話、電信などの事に就いて話をしたならば、当時の人は信用したであろうか。（省略）今日の世の人に向かって、「今に太陽系各星と自由に交通する機関が出来る。」と云ったならば、世の人はそれを信用するであろうか。

物語は1907年の時点から、1902年の探検を紹介する形式となっています。そうすることによって、この探検は過去の出来事であり、科学の技術がもたらす可能性を示唆する出来事として描かれます。数人の博士、詩人や新聞記者からなる探検隊は、1902年4月1日にグラスゴーを離れます。乗組員の乗る飛空機は英国の二人の学者によって発明され、国の援助によって作られたものです。物語の冒頭で語られる宇宙への出発という場面は、1860年代に発表されたジュール・ヴェルヌの二作の月世界小説に共通するいくつかの要素を持っています。例えば、乗組員になるためには、国民のなかから厳選な選抜がされる点、探検隊の成功によって国が国際的な名声を得る点、そして出発の際に大勢の人々が見送りに参加する場面が描かれる点です。これらの両テキストに見られる類似点から、堀内は、明

治二十年代に数多くの翻訳で人気を博したヴェルヌの科学小説(*scientifique romans*)を知っていたということが窺われますが、ここで注目したいのは作品内で、科学というものは、社会向けの行事でもあり、国威の根幹でもあるものとして描かれていることです。

しかし、堀内の「月世界探検隊」には科学のもう一つの面がみられます。それは、世界を知る道具としての科学です。こういった面は月世界での探検の場面、天文学者が周りの世界を「読む」ことで月の地理学的な特徴を伝えるという行動から看取することができます。本作は天文学者の声を通じて、月に関する科学的な情報を読者に提示する。このように、学問的な情報を提供することは「月世界」特集の一つの狙いと考えられます。ここで興味深いのは、本誌のなかで科学的知識を紹介する記事のみならず、掲載された文学作品にも科学的な情報が多く盛り込まれている点です。堀内の探検小説は、科学情報が文学作品に組み込まれ、その内容に影響を及ぼす事例です。

ところが、堀内が宇宙探検というテーマを扱う理由は、技術と科学の進歩を語るため、または科学的な情報を読者に与えるためだけでなく、他者との出会いを紹介するためでもあります。他者との出会いは作品の二つの場面で描写され、一つは月の動物と野蛮的な民族との遭遇であり、もう一つは進歩した文明を持つ民族との接触です。後者の場合は、探検隊の地球人らが進歩した文明を発見することで、関心や驚きを示すのみであるのに対し、前者の場合は、技術的に劣る民族との出会いが驚異の発見の直後、他者を支配することへの憧れに転じています。その民族との出会いは、飛空船から乗組員の巨大動物の群れの発見で始まります。その後、探検の目的は月面の調査から、狩猟へ変わり、乗組員が一頭の獣を銃殺します。作品が描く探検は、科学上の目的地である太陽系の惑星をみることだけでなく、技術的に劣る異界のものを取得しようという憧れも示唆しています。この二つの民族に対する異なる探検隊の態度には当時の日本の対外意識を看取することができるでしょう。

征服としての探検という特徴は、「水星探検記」（1906）と題する短編小説でもよく表れています。この作品も、先ほど分析した作品と同様な展開を持ち、宇宙探検というテーマを取り扱う作品です。「月世界探検隊」と比べると、本作では地球外生命体の捕獲は、探検隊の主な目的となっています。この地球外生命体の捕獲は、「月世界探検隊」と同様に、当時の日本の対外意識を看取することができます。しかし、本作における地球外生命体との遭遇には、特異な点があります。それは、他者を認識するために科学が用いられ、さらに、その科学が他者と自己との差異を図る物差しに用いられる点です。月の物語では他者の判断は人類学者が目を使うだけで下しますが、水星での冒険ではその判断をするのは医者であり、殺した宇宙人の徹底的な検死を行った上で宇宙人の身体的な特徴を測定するというように語られています。身体的な特性の詳細な描写は進化論と環境決定論の視点から解釈された身体構造を羅列することにより、科学的な記事の文体で述べられています。

なかでも一番最初の測定対象として頭蓋骨を選択したことには、十九世紀後半から流通する人種差別的な疑似科学・骨相学が影を落としています。

この物語でも、探検隊は宇宙人を捕まえ、土産として地球に持ち帰ろうとしますが、この狩猟には意外な展開があります。暖かい環境に住んでいる宇宙人は地球への宇宙旅行の途中で凍死してしまうのです。ただし、探検者である語り手は物語の終盤にこの最後のエピソードについて次のように述べます。

死骸丈でも、地球に持って帰ることの出来たのは、何よりの喜びであります。今にその屍骸を博物館に出しますから、皆さんどうか、御一覽を願います！

ここには、もう一つの面、すなわち、娯楽としての科学という面が窺えます。こうして、科学が知識でありながら見世物的な役割を持つ博物館で観られる娯楽としても用いられるのは、同時代に始まった現象です。

本作が掲載された「探検世界」は、「冒険世界」と「武俠世界」と共にいわゆる「明治三大冒険雑誌」の一つであります。それらの雑誌はSFの専門誌とは言えませんが、いずれも上述したようなSF的な作品を掲載したため、思弁的な空想がみられ、SFの起源を考え直すために重要な事例と言え、堀内の両作品は明治から戦後にかけての時期における「古典SF」の一例として扱っても差し支えないでしょう。明治期の「探検世界」や「科学世界」、大正・昭和期の「科学知識」、「科学画報」、「新青年」、「無線電話」などの非文芸誌も含む多種多様な雑誌群に掲載された文学作品だけではなく、欧米のSF文学とカミュー・フラマリオンやサイモン・ニューカムのような科学的知識の普及家の作品の翻訳などもSF的空想を膨らませました。堀内の作品は、日本文学におけるSFの役割をを考え直す貴重な事例だと思われます。

巽孝之は「組織された運動としてのSF」が戦後の日本の最初のSF専門誌である「SFマガジン」（1962-2013）の創刊によって誕生したと述べていますが、石川喬司、横田順彌、長山靖生などが指摘している通り戦前のSFに目を向けたアプローチが重要です。

確かに、明治には、諸外国と同様に、「SF」という言葉さえなかったのです。しかし、「自然科学小説」や「科学小説」、「空想科学小説」という造語も明治期から見られることから、「科学」を生かした空想を使用する文学が存在していたということが分かります。確かに、戦前のSFは一つのSF専門誌や叢書に限られる独立したジャンルだとは言えません。ですが、堀内の作品が示すように、SFは他の文学ジャンルと密接な関係を持っていました。それらの違うジャンルとの関係を考慮に入れないと、初期SFの重要な要素を見逃す恐れがあります。

また、「科学小説」の一種としても考えられる堀内の作品はSFの起源だけではなく、日本近代文学のより多様な傾向を表現していると思われます。それは、明治期に成立した写

実主義から距離を取った傾向であり、「アンチ・ミメシス」(*anti-mimesis*)という特徴を反映した傾向です。「アンチ・ミメシス文学」とは、現実の模倣から離れる思弁的な文学と言えます。堀内新泉の作品は当時の一般文壇にも通じる重要な一面があります。それは、現実を真実らしく描いた模写を、つまり写実主義の言葉でいうと、ありのままに描いた現実を提供するという要求を抱いていない物語の一種で、幻想的な要素の使用によって非模倣(*anti-mimetic*)の世界の構築を可能にする物語の一種のことです。堀内の作品の場合は、そういった非模倣世界の構築は、知識の普及を目指す物語の道具でもあり、作品のテーマでもある科学というものが可能にするのです。上述の作品の世界に「アンチ・ミメシス」が顕れているところは、技術的な進歩、例えば、宇宙旅行のできる「新飛空器」を使うことで現実から離れたというところです。

坪内逍遙の「小説神髓」では「^{アーチスチック・ノベル}模写小説」と写実主義(*mimesis*)について次のように述べられています。

小説すなはちノベルに至りては(省略)世の人情と風俗をば写すを以て主脳となし、平常世間にあるべきやうなる事柄をもて材料とし而して趣向と設くるものなり。／(略)／小説は常に模擬を以て其全体の根柢となし、人情を模擬し世態を模擬し、ひたすら模擬する所のものをば真に^{せま}逼らしむと^{つと}力むるものなり。

「小説神髓」の一つの根本的な主張は、人々の生活を文学の最も基本的な対象と見なすべきだろうという意見です。逍遙は文学が芸術になるためには、現実の模写的な描写と、人間の模倣という二つの要素を必須条件として挙げています。しかし、堀内の探検小説は、「世の人情と風俗」の模写の外にある物語、つまり非現実の題材を扱う文学の可能性を開きます。SFの起源を明治期まで遡ることによって、日本近代文学の初期段階に「アンチ・ミメシス」という特徴を活かす物語の一種を確認し、そのような数多くある非模倣の文学の多種多様な表現方法の一つとしてSFを考察することができるでしょう。

もちろん、堀内の創作に反自然主義的意図があったと断定することはできません。しかし、「スバル」(1909-13)、「三田文学」(1910-)、第二次「新思潮」(1910-11)が展開した反写実主義運動に先行して、堀内がこうした作品を描いていたことは、堀内の作品に見られるSF的想像力が、反写実主義運動に何らかの影響を及ぼしていた可能性を考えることが出来るのではないのでしょうか。こうした観点で検討することで、堀内の作品は単にSFの萌芽であるのみならず、当時の文学状況に深く関連する作品であると見なすことが可能になります。

このように、「組織された運動としてのSF」に拘るのではなく、むしろ、広くSFを捉えていくことは、SFというジャンルにとっても、また当時の文学状況を考察する上でも、重要な観点であると言えるのではないのでしょうか。